

こんな漢方薬を知っていると便利です！

ひろこ漢方内科クリニック院長 高橋浩子先生



漢方内科には、風邪、便秘、胃痛、下痢、慢性の咳、更年期、不妊、産後の不調、肌荒れ、耳鳴り、夜泣き、頭痛、腰痛、冷え性など内科の枠を超えた様々な症状の人がくる。症状があるのに検査しても異常がなく、ドクターショッピングに陥っている人も少なくない。

西洋医学は「病」の責任病巣を明確にし、ピンポイントで治療していく医学であるため、検査異常のない症状の治療は苦手分野の横綱で、胃薬、鎮痛剤、安定剤など、症状の数だけ薬がてんこもり状態になる。しかも症状はたいしてよくなり、満足度が低いことが多い。

これに対し漢方医学は、「病」ではなく「人」をみる医学であり、環境や体質もあわせて考える。訴える症状はすべて、病態を知る手がかりになるため、多愁訴はウエルカムである。家庭や職場環境など、詳細に問診する時点から治療は始まっている。漢方薬には多面的な効果があるため、せいぜい2剤も処方すれば症状はよくなる事が多い。症状によっては即効性が期待でき、自分の症状にあわせて飲めばいい。治療で大事なものは、薬の足し算より引き算である。西洋医学と漢方医学、それぞれの長所短所をふまえた柔軟な治療が望まれる。

漢方薬は主に草根木皮のような生薬を複数組み合わせで作ったもので、原始時代に食物を探し求める過程で毒物や薬物としての役割を持つ物質を経験的に反復、進化させ、薬物療法を編み出してきた。医食同源と言われる所以である。処方構成は2000年前とかわらない。

今回は、こむら返りに頻用されている芍薬甘草湯を中心として、関節痛の桂枝加朮附湯、不安や動悸の桂枝加竜骨牡蠣湯、こどもの夜尿や喘息の小建中湯、月経痛の当帰建中湯、緊張不安の四逆散、更年期の加味逍遙散、ストレス対策の大柴胡湯などをとりあげ、漢方薬の魅力をわかりやすくお伝えしたい。

[学歴・職歴等]

1988年 徳島大学医学部卒業 徳島大学第三内科(呼吸器膠原病内科) 入局
1989年 高知県農協総合病院
1991年 国立療養所東高知病院
1993年 徳島大学病院
1997年 医療法人たかはし内科 副院長
2013年 ひろこ漢方内科クリニック院長 現在に至る

[所属学会・資格等]

日本内科学会 総合内科専門医
日本東洋医学会 漢方専門医
日本性差医学・医療学会

[著書等]

「50歳からのつらい症状にはこれしかない！」 ワニブックス 2015年